

## 50 年の節目

(公社) 日本透析医会

会長 秋澤忠男

出だしから私事で恐縮ですが、私が透析医療に携わってから 50 年になりました。1973 年に医師国家試験に合格し、入局を希望した大学の内科は大学紛争の影響で各研究室に入局することになり、私は腎臓研究室を希望したので、最初から透析患者を担当することになりました。まず病棟で 500 mL の腹膜透析液ボトル 40 本を並べて閉鎖回路を作成し、黄色の塩化カリウム注射液が均等に分布するよう長時間の準備運転後に、腹膜ボタンを外してカテを挿入、10 時間以上に及ぶ腹膜透析施行の訓練を受けました。次いで血液透析に移行、透析室は木造の旧結核病棟に残存した小屋で、冷暖房はなく、職員は医師の他、大学の正規職員でない技術員がいるのみでした。透析器はコイル、シャントは多くが外シャント、新米の私は技術員のお手伝いとして透析の準備、回路の接続から返血までの管理、そして後片づけと、病棟業務の傍らこき使われましたが、この過程で、前年までのキールの膜張りや洗浄は比べ物にならないほど厳しい仕事であったことや、経済的事情で透析を諦めざるを得ず、「金の切れ目が命の切れ目」で命を落とされた例などの経験を学ぶことができました。

当時の資料によれば、1973 年の透析患者総数は 6,148 人（入院が 36.7%）で、外シャント症例が 38% 残存し、透析装置はコイル型が 4,986 台中 2,016 台と最も多く、次いでキール型が 1,913 台で<sup>1)</sup>、透析療法が更生医療の適応となった 1972 年の前年である 1971 年末では、透析患者の 63.9% を健保本人、19.5% を生活・医療保護など自己負担のない患者が占め、健保家族や国保患者は多額の自己負担から治療を享受できなかった事情がうかがい知れます<sup>2)</sup>。原疾患については、1977 年末で慢性糸球体腎炎が 75.8% を占め、糖尿病性腎症は 3.2%、腎硬化症は 1.2% に過ぎません<sup>3)</sup>。平均年齢は 1978 年 11 月で 43.07 ± 13.9 歳、30～50 歳が全体の 60.4% を占め、60 歳以上は 14.4%<sup>4)</sup> と、若年者と腎炎患者が圧倒的多数を占めていました。にもかかわらず生存率は 1 年 70%、3 年 37%、5 年 26.4% と、極めて不良でした<sup>5)</sup>。

それから 50 年、透析器は中空糸型に代わり、溶質除去性能と生体適合性は飛躍的に向上し、透析液は清浄化され、透析液供給・監視装置の充填、返血、除水、補液機能は自動化され、オンライン HDF が主流となり、透析液の組成や抗凝固薬は多様化し、これらの技術を生かして、従来透析の適応外とされていた重度の合併症を併発する患者や超高齢者にも透析治療が実施されるようになりました。一方で、長期透析症例の増加から、CKD-MBD や  $\beta$ 2M アミロイドーシスなど新しい合併症の登場を含め、合併症は多様化しましたが、ESA、HIF-PH 阻害薬、多種のリン低下薬、静注・経口の VDRA と calcimimetics、降圧薬、昇圧薬、脂質低下薬、止痒薬、抗菌薬、抗肝炎ウイルス薬、PTA など次々と新薬、新技術が開発され、重症化は抑止されています。感染対策からベッドの間隔は広く保たれ、施設によっては外来患者の送迎が行われるなど、治療環境や患者サービスも飛躍的に向上しました。この間の成果は、平均年齢は 26 歳上昇し、糖尿病患者の割合が 36.4% 増加する

など、高齢化と予後不良な患者の増加にもかかわらず、1年、3年、5年の生存率が90%、77%、65%を維持している事実からも裏付けられます<sup>6)</sup>。まさに、この50年は透析医療者にとって幸せな50年であった、ともいえるでしょう。

しかし今後は厳しい現実が待ち構えています。精神・神経・身体機能の低下した患者にいかに安全な透析治療を提供するか、そうした患者と透析からの離脱を含めてどう向き合っていくか、安全で効果的、かつ快適な透析医療を提供できる原資は確保できるか、SDGsのなかでGreen Dialysisは実現できるか、などなど厳しい現実が目の前に広がっています。こうした課題を解決し、乗り越えていく日本透析医会の使命達成に向け、会員の皆様のさらなるご協力を切にお願い申し上げます。

#### 文 献

- 1) 人工透析研究会会誌 1974; 7: 184-189.
- 2) 人工透析研究会会誌 1973; 6: 184-188.
- 3) 人工透析研究会会誌 1978; 11: 611-617.
- 4) 人工透析研究会会誌 1979; 12: 159-163.
- 5) 人工透析研究会会誌 1972; 5: 92-97.
- 6) 日本透析医学会 統計調査資料 (2021年末集計).